ホンモノは探究心を連れてくる

小谷城跡

長浜市湖北町伊部

牛谷好伸さん
（長浜市歴史遺産課）

「いつもは作業着なんですよ。今日みたいな格好はたまたまなんです」

カメラを向けると照れ臭そうに笑った。中学生の頃、考古学に興味を持ったという牛谷好伸さん、今では遺跡調査に欠くことのできぬスペシャリストだ。

考古学は文献にない時代を明らかにするもの

考古学といえば、探検隊のような格好をして、お宝を発掘する世界を想像しがちだが、けっしてお宝発見が最終目的ではない。かつて、この場所に何があったのか、それは、いつの時代のものでどんな建物だったのか、どんな人がどんな暮らしをしていたのか。当時の暮らしをモノに語らせ、導き出すのが発掘調査員の役割だと牛谷さんはいう。

「歴史を知る方法で、多くの人が思い描くのが古文書や絵図といった文献史料だと思います。でも、文字の資料が何も残されていないこともありますよね。例えば、戦国時代の権力者の記録はたくさん残っているけれど、民衆の暮らしは、さほど多くは残っていない。文献のない時代や、文献に記されていない生活行動を、石器や土器、建物跡などのモノを手掛かりに明らかにするのが考古学なんです」

そんな牛谷さんが、近年、携わった発掘調査に小谷城跡がある。史跡の発掘調査の目的は、調査内容を今後の整備や活用に役立てることだ。小谷城は戦国大名浅井亮政、久政、長政の三代の拠点で、浅井三姉妹が生まれたことでも知られる城跡。山頂から南に二つの尾根が伸び、東の尾根には大広間、本丸など小谷城の中心となる曲輪（くるわ）が連なっている。

▲牛谷好伸さん

調査の場所は、二つの尾根の間にある清水谷。浅井氏の居館（御屋敷）跡という伝承が残り、その存在は江戸後期の絵図にも描かれている。今回の牛谷さんのミッションは、この谷で人が暮らしていた痕跡を確認すること。それは、伝承と絵図でしか見えていなかった浅井氏の御屋敷跡を、モノによって検証するという作業でもある。

バウムクーヘンを剥ぐように

発掘作業が行われたのは平成28年（2016）から30年の3年間。

「小谷城跡というと、どこにでもお宝が眠っているように思われがちですが、入念に調査をし、限られた範囲の中でさらにポイントを定め、発掘を行っています。それでも思うような結果が出るわけではありません。今回の調査で

▲小谷城跡全体図（写真提供／長浜市）

▲浅井氏の御屋敷跡という伝承がある清水谷

▲3年間にわたっておこなわれた発掘作業（写真提供／長浜市）

も、1年間は決め手になるモノが何も出ず、プレッシャーとの戦いでしたよ。それに、山城だから足場は悪いし、クマに出くわす可能性だってないわけじゃない。ガサガサ音がすると怖くてねえ、ほんと大変でしたよ」

牛谷さんはそう言うけれど、その表情はすこぶる明るい。

「現場は、発見の連続なんです。同じモノは一つもない。それが面白くてね」。そう言って顔をほころばせた。

調査範囲は、御屋敷があったと考えられている辺りの東西3m、南北23・5m、面積にして およそ71㎡。雨の日も風の日も、炎天下の日も発掘調査は続いた。

作業に使うのは、木の柄の先に、二等辺三角形の二長辺に刃の付いた鉄身が差し込まれている「ガリ」と呼ばれる道具と、園芸用に使うような小さな移植ゴテ。どちらも作業員には欠かせない相棒だ。作業員たちは「彼ら」を手に、バウムクーヘンを剥ぐように、何層にも重なった歳月の中から歴史を慎重に取り出していく。どんな小さな遺物や遺構も見落とすわけにはいかない。神経を集中させ、土の色や質、地面を削る感触・削る際の音の違いにも注意を払いながら作業を行う。牛谷さんが何度も口にする「土の質を見る」作業の連続だ。

古文書や絵図が現実に

調査2年目の平成29年。ようやく、土塁と生活の跡を示す溝が現れた。土塁の存在は、以前から推定されていたものの、今回の調査によって、これまで埋まっていた部分が出現、屋敷跡と言われているところに、高さ2・5mの土塁を確認することができた。そして、その土塁の北側脇で発掘されたのが、溝の遺構だ。幅28㎝、深さ30㎝、自然石を2段に積み上げた溝だ。

「この溝の発見が大きな契機になりました。翌年、範囲を広げて調査をしたところ、溝が東西10mにわたって造られていたことがわかっただけでなく、その北側で建物の根石や柱跡が現れたんです。そして、柱と柱の間隔を測ったところ3・8mという数字が得られたんです。この数字がポイントでね、小谷城山上部分の大広間で発掘されている礎石の柱と柱の間隔が6尺3寸（1・9m）、つまり、今回発見された柱の間隔は、山上部の建物のちょうど2間分だということがわかったんですよ」

さらに、その周辺からは銅銭や皿、水瓶の破片、15世紀以降の越前焼のすり鉢や16世紀前半以降の瀬戸美濃系丸皿も出土した。

土塁跡に石組みの溝、柱跡に根石、そしてたくさんの遺物…。これらのことから何がわかるのだろう。

「土塁は、ここに屋敷があったことを、柱跡と根石は、清水谷に小谷城の大広間と同じ柱間隔の建物が建てられていたことを物語っています。石組みの溝は、生活用水を排水するための溝が建物のすぐ側に造られていたことを、そして出土された遺物は、それらが浅井氏時代のモノであることを教えてくれているんですよ。つま

足元は遺跡だらけ!!

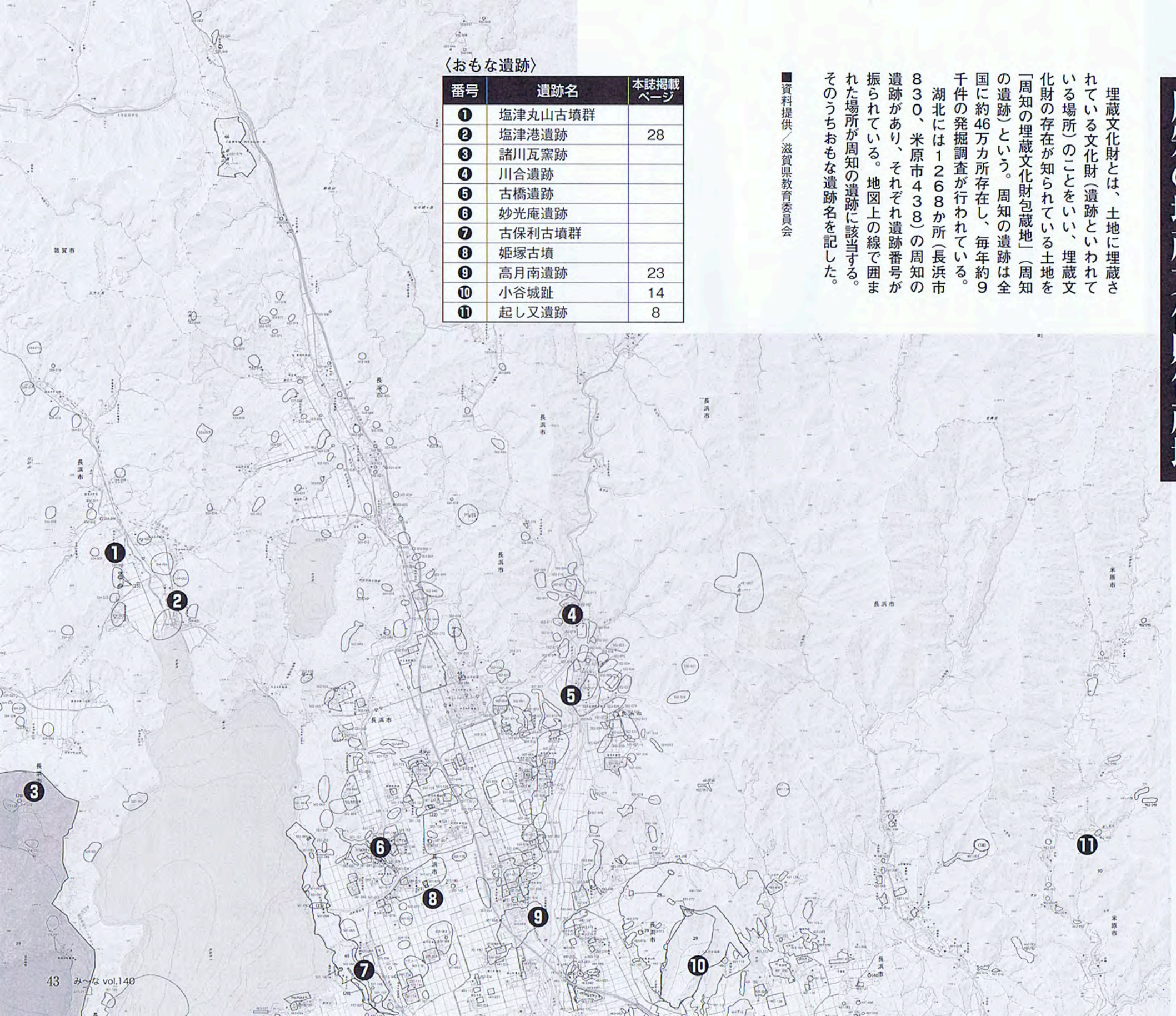
滋賀県遺跡地図（平成28年度）

周知の埋蔵文化財包蔵地

埋蔵文化財とは、土地に埋蔵されている文化財（遺跡といわれている場所）のことをいい、埋蔵文化財の存在が知られている土地を「周知の埋蔵文化財包蔵地」（周知の遺跡）という。周知の遺跡は全国に約46万カ所存在し、毎年約9千件の発掘調査が行われている。

湖北には1268か所（長浜市830、米原市438）の周知の遺跡があり、それぞれ遺跡番号が振られている。地図上の線で囲まれた場所が周知の遺跡に該当する。そのうちおもな遺跡名を記した。

■資料提供／滋賀県教育委員会

〈おもな遺跡〉

番号	遺跡名	本誌掲載ページ
❶	塩津丸山古墳群	
❷	塩津港遺跡	28
❸	諸川瓦窯跡	
❹	川合遺跡	
❺	古橋遺跡	
❻	妙光庵遺跡	
❼	古保利古墳群	
❽	姫塚古墳	
❾	高月南遺跡	23
❿	小谷城趾	14
⓫	起し又遺跡	8